

## 般若心経入門 (4)

### 心経の意義

[http://www4.tokai.or.jp/kyuguan/mutoku/14\\_04igi.html.html](http://www4.tokai.or.jp/kyuguan/mutoku/14_04igi.html.html)

<http://www4.tokai.or.jp/kyuguan/index.html>

### 求愚庵日記

古代哲学と究極の自然対応生活

草舎人 伊藤公芳さんのホームページで見つけました

公芳さま ありがとうございます。  
ここに 意識に 染み入りました。



---

### 犀 (さい) の角

「あらゆる生き物に対して暴力を加えることなく、あらゆる生き物のいずれも悩まずことなく、また子を欲するなかれ。いわんや朋友をや。犀の角のようにただ独り歩め」

「交わりをしたならば愛情が生ずる。愛情にしたがってこの苦しみが起こる。愛情から禍いの生じることを観察して、犀の角のようにただ独り歩め」

「朋友、親友に憐れみをかけ、心がほだされると、おのが利を失う。親しみにはこの恐れのあることを観察して、犀の角のようにただ独り歩め」

「子や妻に対する愛著は、たしかに枝の広く茂った竹が互いにあい絡むようなものである。筍が他のものにまつわりつくことのように、犀の角のようにただ独り歩め」

「林の中で縛られていない鹿が食物を求めて欲するところに赴くように、聡明な人は独立自由を目指して、犀の角のようにただ独り歩め」

「仲間の中におれば、休むにも、立つにも、行くにも、旅するにも、つねに人に呼びかけられる。他人に従属しない独立自由を目指して、犀の角のようにただ独り歩め」

「仲間の中におれば、遊戯と歓楽がある。また子らに対する愛情は甚だ大である。愛しき者と別れることを厭いながらも、犀の角のようにただ独り歩め」

「四方のどこにでも赴き、害心あることなく、何でも得たもので満足し、諸々の苦難に堪えて、恐れることなく、犀の角のようにただ独り歩め」 (後略)

「スッタニパータ」中村元訳・岩波書店

この詩は原始仏教経典の中にある釈迦の詩です。釈迦が仏教を興こし布教を行った頃は、紙はまだありませんでした。文字はインドでは貝葉と呼ばれる木の葉に書かれていましたが、非常にかさばるので、説教は全て口述で行われ、人々はそれを聞き暗記に努めました。記憶力だけが頼りです。釈迦はそれで記憶しやすいように、こうして詩の形で語ったのでしょう。また弟子たちが口述を続けて伝える間に、言葉が洗練され詩になったともいえます。

いずれにせよ目次に新約聖書・ヨハネ福音書の「太初に言葉ありき」を掲げたのも、この口述の意味からです。中国の老子、孔子、ギリシャのソクラテス、この時代は全てがそうでした。

この詩の意味するものは、常に独立・自由を目指し、ただ独りで人生を切り抜けるという釈迦の教えです。宗教はともすると、信者をふやすことが目的で、ご利益を並べ立てる他力本願が多いのですが、釈迦はそれをきっぱりと否定し、自分で努力して願望を達成する自力本願をうたいます。これが釈迦仏教の最大の特徴です。

布教のための心経

釈迦は悟りを開いてから死ぬまでの四十五年間、インド中を回って集会場に信者を集めて語るという形で布教活動を続けます。この説教を弟子や各地の修行僧たちが記憶し、貝樹の葉にメモを残し、外で信者に語り続けたものは膨大です。

これは原始仏教経典として今もインド南部、タイ、ミャンマー、スリランカの  
小乗仏教寺院に残りますが、これらは各教派ごとに纏められ、さらに釈迦の死後、  
六百年以上経った紀元二世紀頃に大乘仏教の教派集団の元で新しく編集され、今  
日の中国、日本などに伝わる経典と成ります。経蔵、律蔵、論蔵の三蔵に分類さ  
れ、その数は合計一万二千巻という膨大なものです。中でも釈迦仏教の中核であ  
る大般若経は六百巻・五百万字という大経典になりました。

仏教をあまねく広めたいという釈迦の思いを汲むと、この大経典を短くし、誰  
にでも暗記出来、どこにでも持ち歩けるほどコンパクトにしなければなりません。  
大乘仏教派ほどその思いは強く、そこで生まれたのが般若心経です。

現在、日本でもっとも普及しているのは、七世紀前半に玄奘（げんじょう）が  
訳した「仏説摩訶般若心経」ですが、これが何時、誰の手で編集し、生み出され  
たのか分かりません。大般若経を短くしようという努力は、釈迦の死後、各教団  
で怠りなく続けられていました。大品般若経、小品般若経、十万頌般若経、八千  
頌般若経、金剛般若経、般若理趣経、道行般若経、放光般若経などがその努力を  
忍ばせます。

## 世界最古の心経

今の般若心経は紀元二世紀から三世紀にかけて生まれたものと推定されますが、  
玄奘より前の般若心経が現在、奈良・法隆寺に貝葉に書かれたものが残っていま  
す。世界最古の般若心経です。これを見ると、内容は玄奘のものと余り変わりま  
せん。五世紀初の亀茲国生まれの僧・鳩摩羅什（くまらじゅう）が中国に伝えた  
般若心経も七世紀の玄奘のものと較べると、最初に釈迦の話を書くため集まった  
たくさんの信者の様子や、終わった後、信者たちの間に感動の渦が広がった、と  
の記述が玄奘の場合は省略されているだけです。

法隆寺のものも鳩摩羅什と同じです。つまり玄奘よりはるか前に般若心経は存  
在していたのです。それにしても六百巻、500万字の大般若経を、わずか26  
2字に短縮した心技は驚嘆に値します。般若心経はまさに大般若経のエッセンス  
そのものです。

そしてこの中で、人間と人間を取り巻く全ての世界をはじめ仏教教理まで否定  
する「空」の観念を明確に打ち上げるのです。見事なドラマです。般若心経は後  
世に編集されて生み出されたとはいえ、これが釈迦仏教を代表する大般若経その  
ものなのです。

大般若経を全て訳した玄奘がこの般若心経を訳したとき、この思いと感動から、鳩摩羅什版には無かった「仏説」の文字をわざわざ題名に付けたのでしょう。時代的に釈迦が説いたものでないと承知しながら、玄奘にとってはこれこそが釈迦の教えの真髄だと思ったからでしょう。

## 彼岸の誤解

般若心経は現代でも人気は高く、短いので暗誦出来る人は多いのですが、多くの方は意味を正しく理解していないし、誤解も多くあります。そのひとつは「全てが空というのは生きている限り理解できない。死んで初めて達する悟りだろう。だから死んで仏になるというのか」という疑問です。

釈迦のいう空の悟りは、生きて悟れというのです。生きてこの心境に達すれば、彼岸に行け、そこで菩薩となってさらに修行して、最後に涅槃に至る。涅槃は極の安定の地、ここで初めて仏陀となる、というのです。つまり、彼岸に行くことは仏になるのではなく、仏になるための入門をするのです。菩薩と成れば、自由に人間界と行き来できます。大衆を救済するために人間界に降りる菩薩たち、地藏菩薩、観世音菩薩、慈母観音、千手観音、文殊菩薩とたくさん出てきます。これらが生きて人間界に戻られた菩薩たちです。

「即身仏といって厳しい修行をして悟りに達し、そのまま仏になるというが、あれは実際には死ぬことだ。空の悟りを得たなら、やはり死ぬのでないか」という人もいます。

何度も言いますが、空の悟りは死ぬことと関係ありません。全てが空と知って、心の迷いが取れ、澄んだ心、澄んだ目でもものを見ることが出来る、これこそが空の悟りなのです。釈迦はこうした人を少しでも多くしたいと、般若経を語り、彼岸行きを奨めたのです。

最も多い誤解は、釈迦の彼岸とその後の阿弥陀経の説く極楽浄土とを混同して、彼岸即極楽と思っている人が多いことです。釈迦の説く彼岸と阿弥陀経の極楽とは関係ありません。阿弥陀経は日本に多い浄土宗、浄土真宗のお経として有名ですが、その極楽浄土は仏教信者を増やすために考え出された、また出来るだけ多くの衆生を救済したいという思いから出た社会福祉的なサナトリウムです。釈迦の彼岸はあくまでも仏教を極める修法の場です。

彼岸に到った菩薩は仏でなく「悟りを求める人」と定義されていることを忘れてはなりません。

釈迦は、彼岸と人間界の間に大きな河を想定して、向こうが彼岸、こちらが此岸（しがん）としていますが、私は境界は広い河でなく、細い1本の線であってもいいのじゃないかと思います。次元の違う世界が隣り合っている。悩み、苦し

みの世界と安心と充実の世界です。悟れば片足伸ばすだけで、異次元の彼岸の世界に入れる。気持ちの持ちよう、気が変わればいつでも戻ってこれる、こう考えれば気楽です。現世に戻った菩薩たち、昔から周囲に「ホトケ様のような人」と呼ばれる人がいますが、あの人達もそうでしょう。

### 心経は仏教の入門書

以上が般若心経の意義ですが、般若心経が釈迦仏教のエッセンスと言うわけではありません。仏教には慈悲とか平等という精神がありますが、心経では触れていません。

心経はあくまでも「空」を語る経で、しかも悟りの結果である「空」の実態を説明しているだけです。つまりこの経は、釈迦仏教の本質である「空による苦からの解脱」に関心を持たせ、ここから釈迦仏教に誘導しようとしているのです。

私はとかく「262文字の心経は大般若経のエッセンス」と書きますが、実はもっとみじかい究極のエッセンスがあります。たった4文字、それは「一切皆空」です。この意味が分かる人は彼岸にかなり近づいたといえるでしょう。このあと「諸行無常」とくれば、もう直前です。